（熊本県による荒瀬ダム説明会における発言１）坂本地区に住むＨさんの訴え

（平成 20 年 11 月 9 日：坂本町中津道社会教育センター）

私達とこの荒瀬ダムとの関わりというのは、もう知事も既に数字を示された通り 50 数年間関わってきたわけでございます。その時代背景というのはありまして、その時はそれなりの大きな国策としても、また県の事業としても必要なものであったということは充分理解出来るわけです、まあ知っとるつもりでいました。

ただ、我々がここに大きな疑問を持つのが、これを造る時に地域になされた当時の企業局の方々の説明というものの、あまりも、後で分かったことでございますが、でたらめ過ぎて造るが為だけの目的の為にそのしゃたくをされたということに、すごく腹立たしさいわゆる反発をこうわけでございます。

具体的に申しますれば、この下流地域にも毎年冠水する常襲地帯といわれた地域もございます。そういう問題もこのダムを造ることによって解消しますよと、またダム湖の上は大変な観光資源になりますよと。それをふまえて実際、ダム湖の中に屋形船あるいは温泉センターを作られた方もございます。まして電気料金も安くなりますよと。今度はそのダム湖の中じゃ釣堀としてのかなりの大きな良い観光資源としても出てきますというような、そういうお話がございまして、地域住民としてはこの球磨川水源の中のダム造りというのは初めてのことで誰も経験したこともない、またこれが結果としてどういうことに陥るのかということは誰も知らなくて、やはりその話しを皆信じて、そして地域住民こぞって賛成して、本当にダム造りとしては国内でも例のないスピードの例、造りあげたという、そういう時代背景があるわけです。

しかしこれが 10 数年経ってみますと、当時の話しとしては全く違った様相が出てきたんです。ここで初めて我々はこれをすごく疑問視すると共に、当時出された話がいかに違ったものであったかということを初めて実感したわけです。そういうことで、今度はその荒瀬ダムというものが地域にもたらしたものというならば、何があるのかと。

利害の上でいけばプラスというものははっきりいって何一つないわけです。

この時間が経過していく上に、地元でこの川の魚、特にこの鮎を媒体として地域で営んでおられた旅館も、この小さな町の中に 7 軒という数があったんです。それは 50 年の中には 1 軒もなくなってしまいました。ましてそれにかかる釣り船あたりも 10 数軒あったのがこれも 1 軒もない状況に陥ってしまった、そういう経済損失ちゅうのはこの町については計り知れない大きなものがあるわけです。まして、その漁業を生計として営んでおられた方、これももうそれでは生計が出来ないということで皆さん皆やめてしまわれて、あるいは日雇い労働者に変わったとか、そういう大きな様変わりで生計を立てねばならないような状況になったわけです。

そしてまず、その水害の在り方そのものがもう大きく変わったところも我々はものすごく疑心を持つわけです。といいますのが、ダムが出来る前の下流域の水害の状況ちゅうのは、仮にどんな大きな水害が発生してもその中に持ち込まれることはきれいな、建設業でも使えるようなきれいな砂がさらっと入る程度です。水が引くとそのあくる日から生活が出来るちゅうような状況だったです。ところがダムが出来た後はご存知の通り、この中に溜まったヘドロが流れ込んで来てとても人ではどうしようもない、いわゆる建設機械を持ち込んで除去せねばならないというような大きな変化が出てきたわけです。これこそやっぱし我々に言わせれば人的な被害だというふうに言わざるをえない状況です。そういうことで、何一つこの坂本町にとって利になるものというのは、このダムからもたらされたものっちゅうのは何一つないといっても過言じゃないというふうに思います。そういうことで、私はこのダム撤去ていうのを一日も早くお願いしたいと思う。